

強行 許せない

「悪法」の過程見つめる

安全保障関連法案の採決が強行された17日の参院特別委員会。戦争を知る世代はどうみただのか。



兄がビルマで戦病死

「戦後最低の悪法が生まれてしまう」。傍聴席の順番をロビーで待っていた東京都国立市の西川重則さん(88)は、採決強行の様子を映すテレビ画面を見つめた。16日夕から国会に詰め、ソファに座って少し仮眠しただけで朝を迎えた。国会傍聴を続けて16年。法案の審議入りから4カ月近く欠かさず傍聴した。電車が遅れても間に合うように毎朝6時半に家を出る。原点にあるのは「兄を奪った戦争とは何なのかわからない」という思いだ。香川県の農家の7人きょうだい。学費が出せず、6

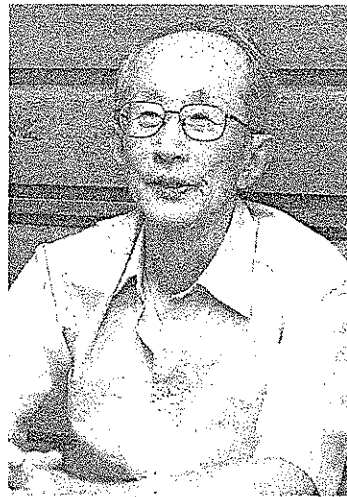
歳上の兄は進学をあきらめて上京した。読書家で文章を書くのが好きだった。読み終えた本に「よく勉強しろ」と書いた手紙を添えては、末弟の西川さんに送ってくれた。20歳で出征する時、「お国の役に立てる」と喜んだ兄はビルマ(現ミャンマー)で戦病死した。知らせが届いたのは、終戦の1カ月後。母と一緒に泣き崩れた。

戦争は国会から始まる、が信条だ。安保法案が成立してもすぐ戦争が始まるわけではないことくらい分かっている。でも、戦前もそうだった。治安維持法などの「悪法」が一つひとつ国会で生まれる中で、太平洋戦争に突入していった。「悪法が生まれる過程を見つめることが私の使命だと思っている」。今回の安保法案審議で最もあきれた

のは、閣僚による「悪法を法案に適用させる」との答弁だったという。「法案が悪法より優位だなんて一度

無理する必要あるのか

でも言うてはいけない。それを平気で口にしたことが怖い」法案は成立へと向かう。



満州から引き揚げ

「無理をする必要があるのでしょうか。自衛官や民間の人たちが命を落とすことになったら、誰が責任をとるのかという議論さえも尽くされていないのに」。大阪府東大阪市で暮らす根木俊彰さん(82)は、そんな

思いで朝から特別委のテレビ中継を見続けた。旧満州(現在の中国東北部)の奉天で生まれた。1945年8月、日本人学校で玉音放送を聞いた日の午後、中国人から「おまえたちの国は負けたんだ」と言われた。「日本人が中国人よりも上」と植え付けられていた価値観が崩れた。

「これからも主権者として国会を見続けなければならぬ」。自分に言い聞かせるように語った。(伊木緑)

徴兵され、シベリアに抑留されていた父親とは別々に翌年6月、帰国の途へ。列車で4日かけて着いた大連で栄養失調のために倒れる人がいた。福岡の博多港への船中で息絶え、海に水葬された人もいた。軍人だけでなく、市民も死に追いやられる様を見て「戦争って残酷や」と思った。理性が働かなくなり、多数の人たちの考えが一方に傾いていく戦争。根本さんの目には、与党による「数の力」で強行された参院特別委の採決と重なった。「戦争で死んでいった人たちの苦勞が無にならないようにしてほしい」と思う根本さん。「良識の府」と言われる参院の本会議の採決が残されているが、心は重い。「覆ることはないでしょう。なぜ、日本はこんな国になってしまったのでしょうか」

(花慶草子)

留されていた父親とは別々に翌年6月、帰国の途へ。列車で4日かけて着いた大連で栄養失調のために倒れる人がいた。福岡の博多港